第46回 「不安」に惹かれる人たち

作家・ドイツ在住 川口マーン惠美

今年の欧州文化首都

旧東独のケムニッツは、今年の欧州文化首都の１つだ。これは、ヨーロッパ文化への貢献を目的として、EU が１年ごとに指定する都市。今年はケムニッツの他、スロベニアのノヴァ・ゴリツァ(Nova Gorica)とイタリアのゴリツィア(Gorizia)が共同でその役目を担っている。

欧州文化首都のマーク

ケムニッツのモットーは「C the Unseen」で、“目に見えないものを見ろ”という意味。C は、see と Chemnitz の頭文字にかけてある。

一方、ノヴァ・ゴリツァとゴリツィアのモットーは「GO！Borderless」。冷戦時代に鉄のカーテンで分断されていた２つの町が融和し、ヨーロッパが一体化することを表現している。「GO！」は２つの町の頭文字だ。

10月の肌寒い晩秋の日に、そのケムニッツを訪れた。私の住むライプツィヒからは普通列車で１時間ほど。ザクセン州では、ライプツィヒ、ドレスデンに次ぐ３番目の都市だが、活気がなく、何だか寂しかった。

ケムニッツは、ドイツ帝国に産業革命が到達した19世紀から、ワイマール共和国、ナチ政権、そして戦後の東独時代まで、一貫して重要な工業都市だった。1990年の統一後は、フォルクスワーゲンやシーメンスなどが進出したが、肝心の車産業が、今、ドイツでは落ち込んでいる。

ちなみに東独政府は1953年、ケムニッツをカール・マルクス・シュタットと改称したが、統一を機に、再び名前は元に戻された。そういえば、現在のライプツィヒ大学も、東独時代はカール・マルクス大学と呼ばれた。社会主義者は名前に拘るのである。

ケムニッツ中心市街地のカール・マルクス像

ケムニッツの町の真ん中には、そのカール・マルクスの巨大な頭部の石像が、やはり巨大な四角い台座の上に聳(そび)えている。社会主義国にある彫像というと、たいてい労働者らしき人たちが拳を振り上げて革命の真っ最中。あまりにも政治的で辟易(へきえき)とすることが多いのだが、ここのマルクス像は口をへの字に閉じて、しかと前を見つめているだけ。その後ろの壁にはかの有名な「万国の労働者よ、団結せよ！」が、いろいろな言語で書いてある。

だから、もちろんこれも政治的といえば、限りなく政治的なのだが、なぜか私の目には政治を超えた芸術作品に映った。ちなみに、ベルリンの壁の崩壊後、共産党を連想させる多くの物が市民によって破壊されたが、なぜかこのマルクス像は残った。ただ、マルクスは、ケムニッツの町とは特段のつながりはなかったそうだ。

中世より繊維工業が盛んだったケムニッツだが、その理由は、漂白の独占特許を得ていたからだという。そこから発達したさまざまな手工業は、17世紀の30年戦争で一旦中断したが、その後徐々に回復。19世紀になると、機械工業が目覚ましい発展を遂げ、ドイツ帝国の重要な工業都市の一つとなった。ヒトラーの活躍し